

居場所と疎外についての、モントリオールでの妄想

連載④
藤本由香里「私の居場所はどこにあるのか」の余白に

国際日本文化研究センター研究員
総合研究大学院大学助教
稲賀繁美

西川祐子さんの『借家と持ち家の文学史』は、帯にもあるとおり、「近代」世紀におよぶ日本語文学を、集団制作による一編の大河小説として読み通す文字通り、「繊細にして破天荒」な書物だ。正傳としての本書に続いて、著者の見事な語り口を生かした口伝が公表されないか、というのが評者の密かな切望である。マンガの世界まで視野を広げれば、松本零士の『男おいどん』が70年代後半の、ワン・ルーム・マンション時代直前までの、日本の大学生の下宿生活の縮図となっていたのにたいして、高橋留美子の『めぞん一刻』が80年代のバブル下の喧噪を傍らにした、奇妙な無重力感を、と或るアパートを舞台に、毎回先延ばしのストーリーとして演じ切った、といった平凡な観察も可能だろう（その終局とほぼ同時に、多くの独身者アパートが、作中に描かれたような家主と店子との関係を喪失していった点でも、今やノスタルジーの物語りである）。個人的な回顧を許されるなら、旧制一高駒場寮が廃寮となった時点で、日本の学生文化は、漱石『三四郎』以来の伝統の、ある終焉を見たとも極言できようか。

先日モントリオールで、日本の現代ポップ・カルチャーに関する学会が開かれた（リヴィア・モネ教授の企画）。その席で、笹野頼子の『居場所もなかった』（1992）を中心に、「居場所」という言葉が、バブル末期からその崩壊後の世相を要約する鍵であることが改めて浮かび上がってきた。それは小谷真理の指摘だが、実際、永沢光雄の『A V女優』（1996）でも、「桂木綾乃」は、SMプレイを始めてファン・レターが突然舞い込み、「生まれて始めて自分の居場所を見つけたような気がした」と告白する（1995）。西川氏の図式を借りるなら、家族の時代から部屋の時代を経て、離合集散の関数を生きるに至った座標変換の結節点が、「居場所」だろう。

ワン・ルームに「居場所」を確保できるか。この問いが『エヴァンゲリオン』の少年・少女たちを包む実存の問いだろう。外来の侵略者たる「使徒」排除を目的としていたはずのサイボーグ兵器。そこへの搭乗を父から強要されるシンジは、自分の使命に「居場所」を見いだせない。少年の纏う

兵器は、少年の意志を増幅して全能たらしめる道具となるどころか、かえって少年の意識そのものが、機械のなかに封じ込められ、蚕食され、終には機械の中核でメルト・ダウンしてしまう。「使徒」の度重なる侵入は、長井真理がかつて「分裂症患者」について語った「筒抜け」を思わせる混乱を齎し、もはや善悪の区別、内部と外部の隔壁は維持できない。存亡の危機のなか、人肉食よろしく「使徒」捕食に及んだ装置は、起源としての種が複合したmulti-specific-beingへと変貌する。かつて『AKIRA』では超能力を獲得したのと裏腹に、「鉄雄」はもはや人体の外見を止め得ない巨大な肉塊へと成長を開始した。それとは逆に、ここでは主人公の自己同一性が爆縮implosionを起こすまで、容赦なく痛めつけられる。

外界を、キーボードひとつで操作可能な映像へと還元する野望。ヘッジ・ファンド世界経済投機戦略家にして自称慈善運動家ジョージ・ソロスの描いた自由世界の夢は、かくして悪夢へと暗転する。究極の居場所かと思われたワン・ルームの壺中天は、そのまま笹野頼子の『説教師カニバットと百人の危ない美女』に置き換わる（中川成美）。透き間という透き間からは、「ジジジ…」という電子通信に乗って、ゾンビ集団が侵入してきては、作中の作家を責め苛む。もはや、回復の糸口たる避難所asylumは、外界からの侵入を許す傷口と区別が付かない。あるいは非人間的な異物に苛まれる肌の痕跡。その多穴質の罅に止まる受苦＝情熱。

私事ながら、Non Resident alienとして半年北米合州国に滞在した。疎外-alienationは、語源としては、譲渡の権利を意味する。自らの身体の所有権すら、他人に譲渡することを強いられる。浮草の快さと根付かぬ居心地の悪さとの両ぶりりん。それが市民権なき外国人たる境遇の定義だろうか。居場所なき流離に取り憑かれた末、モントリオールに集った日本人学者たち。かれらは、何故かオタクを嫌いながらも、オタク的行動パターンで、雪解けの北国の2言語併用都市を徘徊していた。「脱映画館時代」をビデオ・ショップから書店、そしてCD屋と流浪しながら。